

第Ⅱ部 街道の景観と文化遺産

八幡市域街道景観調査報告

—東高野街道—

上杉 和央

はじめに

今回、下記の要領で東高野街道の街道景観調査を実施した(図1)。枚方市との境界となっている洞ヶ峠から市北端部にある八幡市駅までは、およそ4.3kmの道のりであり、この距離を6時間30分かけてゆっくりと歩きながら調査していった。街道の街並みや水路の状況、また石造物などを調査項目としたが、今回の調査ルートには三宅安兵衛遺志碑がきわめて多く残されていることから、その調査が主となった。

街道景観調査は現地に刻まれた歴史の痕跡を探しだし、その意味を考える好機であることから、本調査の一部については、2回生以上を対象に開講している「歴史地理学」の課外授業の一環としても位置づけ、出席可能な学生たちと一緒に調査を行った。よって、本報告には下記の学生たちによる調査結果も反映されている。

なお、今回は八幡市域の東高野街道ということで洞ヶ峠から歩いたが、実は洞ヶ峠付近から吉井付近にかけては新興住宅地となっていることもあり、旧街道のルートが明確にはたどれなくなっている。そのため、街道景観の調査としてはあまり適していないこともあり、この区間については上杉単独の調査とした。学生たちとの調査は、途中の大芝バス停（松花堂庭園・美術館の最寄バス停）以北について実施した。

<調査概要>

調査範囲：洞ヶ峠（国道1号）～京阪八幡市駅

調査コース：洞ヶ峠～円福寺～吉井～中ノ山墓地～大芝バス停～八角堂～神原交差点～市立八幡市民図書館～本妙寺～安居橋～京阪八幡市駅

調査日時：2010年12月19日（日）8:00～14:30

<調査参加学生氏名>

宇治友紀子（2）・小澤まり（2）・川瀬未紗（2）・菊池花菜子（2）・栗木悠佑（2）・佐久間英喜（2）・島本多敬（2）・多岡佳祐（2）・立石見雪（2）・土井諒哉（2）・鯨絵千夏（2）・西井綾乃（2）・松村祥志（2）・丸山貴久（3）・宮川康岳（2）・宮崎浩史朗（2）（50音順。カッコ内は回生）

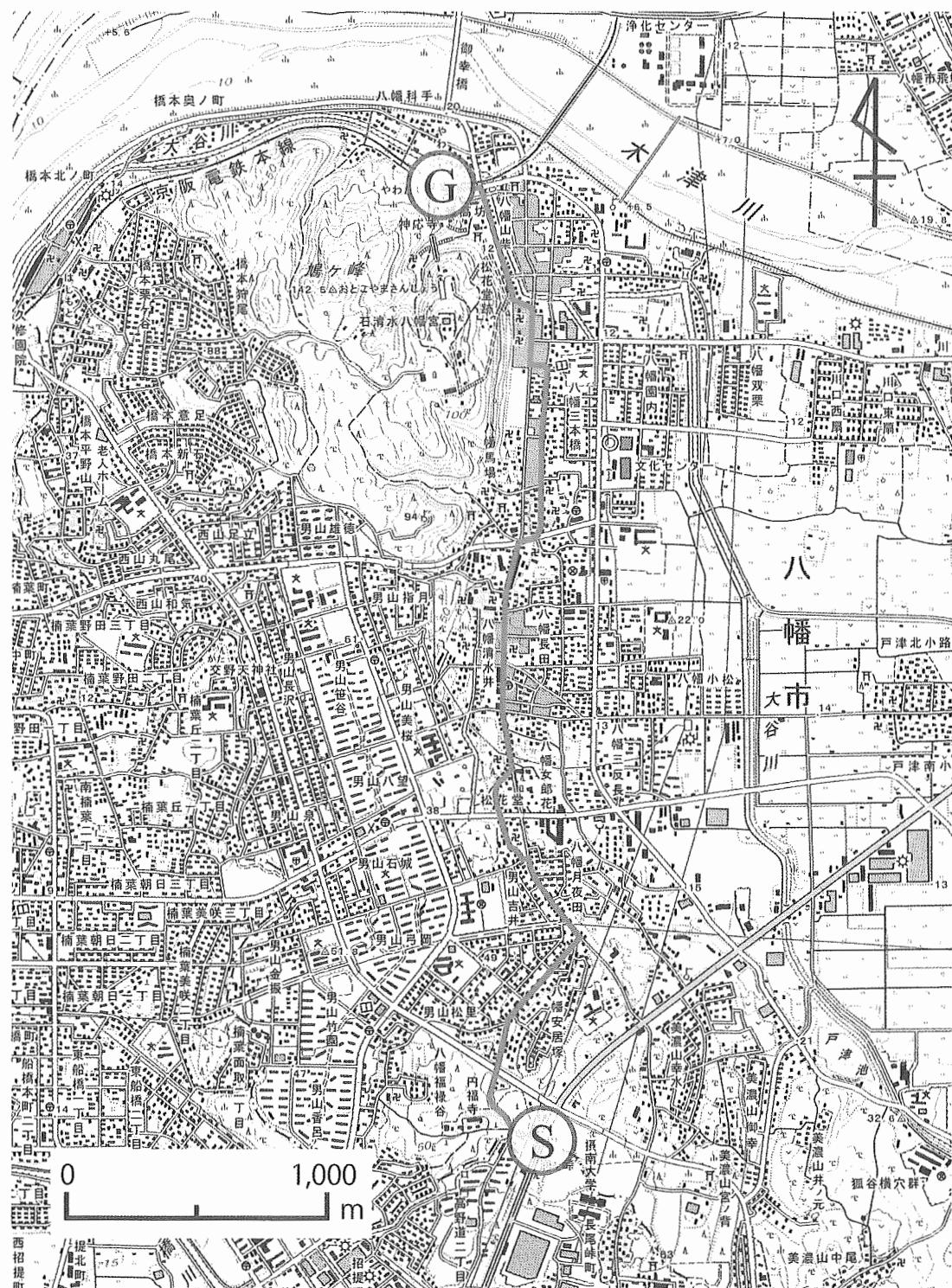


図1 調査範囲

原図：25,000分1地形図「淀」（平成17年更新）

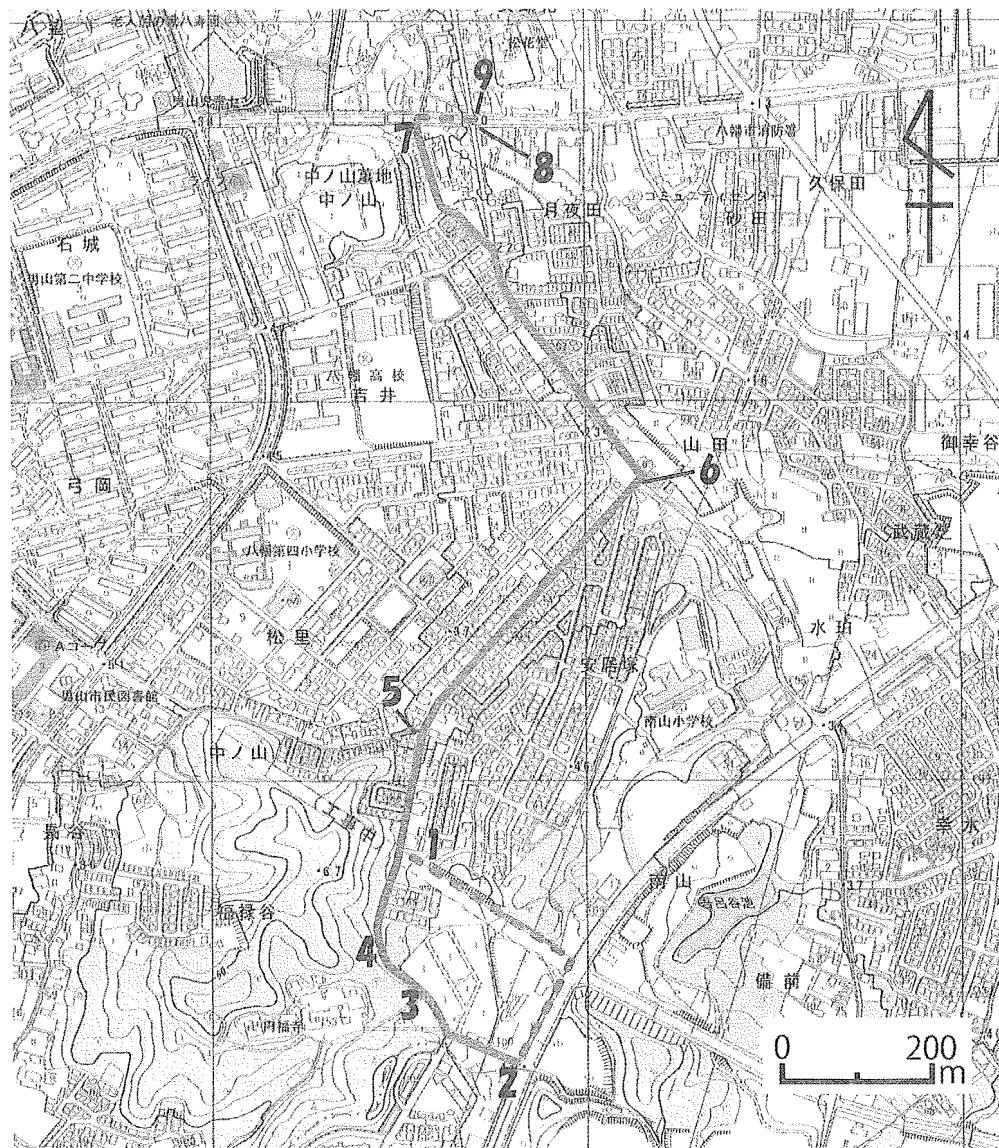


図2 調査ルート1：洞ヶ峠～大芝バス停

原図：10,000分1地形図「八幡市」（平成15年部分修正）

1. 洞ヶ峠～大芝バス停

7時46分に京阪樟葉駅を出発する京阪バス30系統に乗り、7時55分に福禄谷バス停に到着する（図2内1（以下数字のみを表示）・写真1）。このバス停のある場所は道路が立体交差しており、下の道が目指すべき調査ルートである。バス停のすぐ近くから下の道に降りる階段もあるが、市界から歩くために、ひとまずそこから南東方向に歩き、国道1号に。なお、平成15年部分修正の10,000分1図を用いている図2では、この道は「工事中」の記載があるが、現在は完成済みである。国道1号に出た後、南西に100mほど行くと、スタート地点の「洞ヶ峠」である。東高野街道は洞ヶ峠で男山丘陵を越え、山城国から河内国へと入る。今回は逆ルートであり、河内国・山城国の国境（大阪府枚方市と京都府八幡市の府市境）がスタート地点となる。

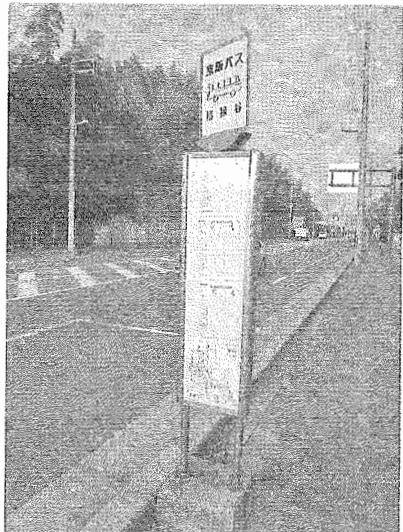


写真1 福禄谷バス停留所



写真2 峠のぼたもち茶屋
八時にて名物頬張ること叶わず。

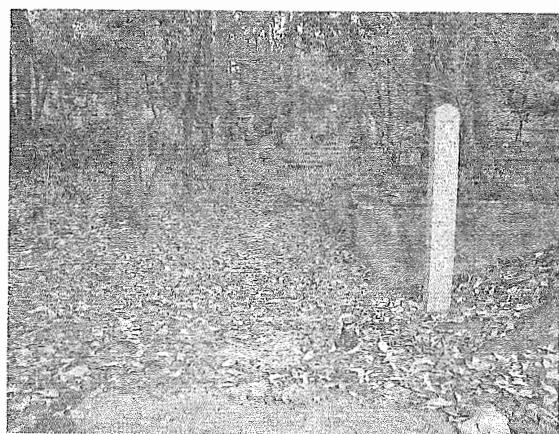


写真3 西国三十三ヶ所巡拝道
左の一番手前が一番札所。

峠には「峠のぼたもち茶屋」が建つ（2・写真2）。

藁葺の構えは国道1号からもよく目立つ存在である。現在は峠を越えること、ないし国を越えることの感慨をまったく持たないままに多くの車が往来する場所となっているが、この茶屋の外観は、往時、ここが重要な峠・境界であったことをふと思いつかせてくれる設えである。

この茶屋の脇には平成6年（1994）に枚方市教育委員会が設置した木製案内板が立つ。そこには「洞ヶ峠を決め込む」という慣用句ができた筒井順慶のエピソードが説明されると同時に、その話が史実とは異なることが明快に記され、末尾は次のように締めくくられる。

順慶は日和見主義の代表者の汚名を着せられ、一方、そのおかげで、洞ヶ峠は天下に知れわたって伝えられている。

地域遺産として伝えられるものの中には、史実とは必ずしも整合しない由緒を持つものも含まれる。そのような遺産をどのように評価していくのか、この説明版は1つの解答例となるものかもしれない。

洞ヶ峠から歩き始めると、すぐに円福寺がある。平成4年（1992）に八幡市教育委員会が設置した案内板によれば、天明年間に斯経禪師により開創された臨済宗妙心寺末の修行道場である。街道沿いに少し行くと、円福寺域内につづく「西国三十三ヶ所順拝道」がある（3・写真3）。順拝道を示す石碑は大正9年4月20日の建立となっている。

円福寺を過ぎて山道を下っていくと道の両側が竹林となる（4・写真4）。見事に管理された竹林であり、また作業用のスペースも設けられている

ことから、ここがタケノコ栽培用の竹林であることが分かる。地形図（図2）を確認すると、円福寺の周囲はすべて竹林となっているようである。ただし、明治18年測量（同22年製版）の20,000分1仮製地形図（「田邊村」図幅）を見ると、円福寺ならびに街道沿いは「松林」もしくは「茶園」であり、竹林は一切確認できない（図3）⁽¹⁾。

福禄谷バス停のある高架道の下をくぐり、振興住宅地区をしばらく歩くと、左側（北側）に「涙川旧跡」を示す石標が現れる（5・写真5・安兵衛碑1）。京都の街道調査ではお馴染みの三宅安兵衛の遺志によって建立された石碑である。ただし、この石碑の場合、記載内容から見て、設置場所は移動されていると思われる。

石碑を後にして北東方向にしばらく歩いて行くと、T字路の交差点に突き当たることとなる。東高野街道はそこを北向きに左折していくのだが、この付き当たり部分手前右側にも石標が建っている（6・写真6・安兵衛碑2）。円福寺を示すこの大型の石標も三宅安兵衛遺志碑である。

その石碑を調査したのち、道を北上してしばらく行くと、旧道が部分的に残る場所が現れる。もみじ寺を通過することができないのがやや残念ではあるが、街道調査であるために旧道へ。この道を行くと、中ノ山墓地の入り口となる。中ノ山墓地については、別項にゆずるとして、入り口付近にある「慰靈碑」に目がとまった（7・写真7）。表面には64名の戦没者の名前が刻まれる。裏面には「大東亜戦争戦没将士追悼の為／昭和廿六年三月建之」とあり、発起人として「詠歌講」10名の名前が挙げられている。この慰靈碑に関しては、他にもいくつかの石標が確認される。敷地を取り囲む石標のうち、入り口に建てられたものか

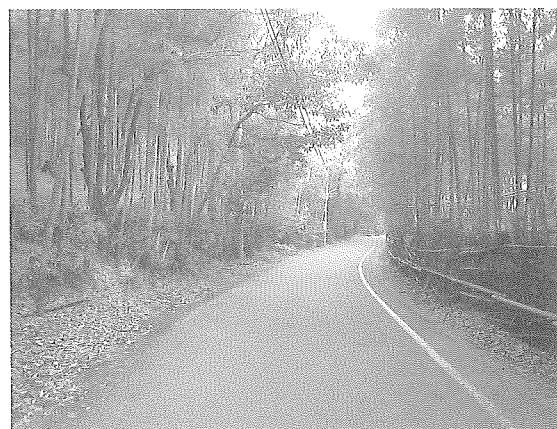


写真4 竹林に挟まれた街道
朝の木漏れ日、いや竹漏れ日が清々しい。



写真5 「涙川旧跡」碑（安兵衛碑1）



写真6 「圓福寺」碑（安兵衛碑2）

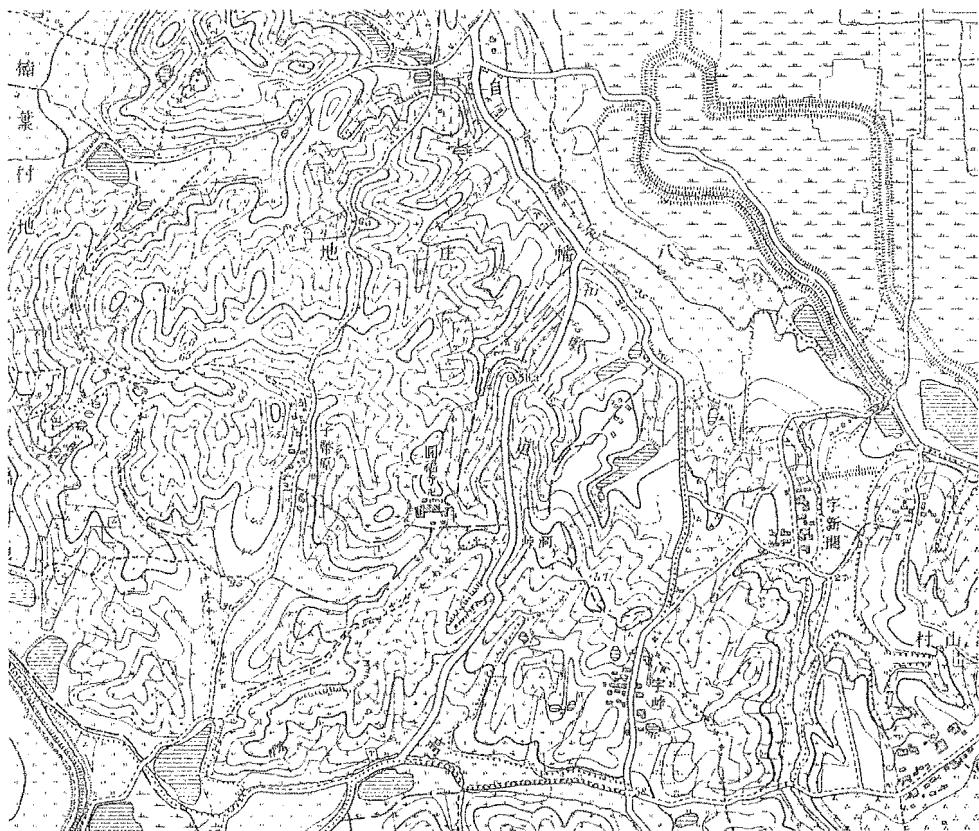


図3 仮製図に見える円福寺周辺の景観

らは「墓地拡張並ニ慰靈碑移転」が昭和30年（1955）11月に実施されたことが分かる。これは道路側から向かって右側の石に刻まれており、そこには「遺族会」とあるが、反対の左側には「八幡町第六区区民一同」とある。また、敷地内の南東角は松などが植えられているが、「植木寄付」が昭和32年（1957）11月に個人によってなされたことを示す石標がある。その傍らにも個人名が書かれた別の石標もあり、あるいはこの者によっても別の時期に植樹がなされたのかもしれない。さらに慰靈碑に向かって左側には、「英靈墓地建設記念碑」が建てられており、建設功労者として八幡町長、第六区長、ならびに遺族会の7名の計9名の名前が刻まれる。裏には「昭和四十六年九月建之」とあり、昭和30年（1955）時の改修とは別に、改修がなされたことが分かる。

2. 大芝バス停～神原交差点

慰靈碑の立つ場所から、一度街道をそれ、学生たちとの合流場所である月夜田交差点に。9時30分の集合時間には全員がそろっていた。いくつかの説明や班分けなどをしていると30分があっという間に過ぎる。その交差点には南東角に「岡の稲荷社」を示す三宅安兵衛遺志碑（8・写真8・安兵衛碑3）、北東角には歴史街道「東高野海道」を示す近年の石標が建っており（9・写真9）、これらを全員で調査したのち、残りの街道を班ごとに歩き始めた時には10時30分となっていた。なお、

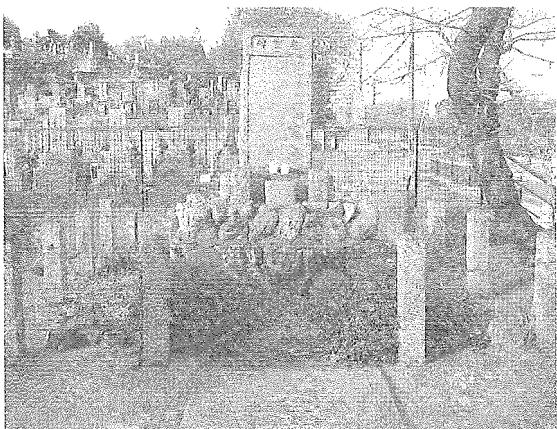


写真7 慰靈碑（手前）と中ノ山墓地（後方）
戦没とは斯くも特別也。



写真8 「岡の稻荷社」碑（安兵衛碑3）
2回生にとって初めての石碑は三宅安兵衛遺志碑。



写真9 歴史街道「東高野街道」碑



写真10 「正平役血洗池古跡」碑（安兵衛碑4）

写真9のような石標を歴史街道碑と呼称しておきたい。この碑は街道沿いに据え付けられており、現代版の道標として、また地域遺産を表示するサインとして興味深いものとなっている。ただし、建立年月日や建立主体などの情報が刻まれておらず、詳細が現地では分からぬのが残念である。

図4に示したように、慰靈碑のある旧道まで一度戻り、改めて北上していくとすぐにT字交差点となる。付近の住民の方に話をうかがったが、この辺りは一昔前までは田んぼが広がっていたとのこと。そのT字交差点を右折した直後の左手に「正平役血洗池古跡」という三宅安兵衛遺志碑（10・写真10・安兵衛碑4）がある。この碑は表と裏のみに文字が刻まれているタイプである。そこから家1軒分北東方向に歩いた場所に八角堂に上がる参道があるが、その入り口の「八角院」碑（11・写真11・安兵衛碑5）と八角堂の堂舎の右前部の「母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地」碑（12・写真12・安兵衛碑6）も三宅安兵衛遺志碑である。「八角院」碑は、他の石標とは形が異なり、三角形である。また「母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地」碑は昭和5年（1930）の建立であり、昭和2・



図4 調査ルート2：大芝バス停～神原交差点

原図：10,000分1地形図「八幡市」（平成15年部分修正）

3年の建立が大部分を占める三宅安兵衛碑の中で異例である。この建立者は三宅清治郎で、安兵衛の遺志による石碑建立がほぼ終わってからの建立となっている。なお、「母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地」碑の揮毫者は濱田青陵である。

八角堂から街道に復帰し、3軒ばかり歩くと辻に出るが、そこにも「水月庵」を示す三宅安兵衛遺志碑がある（13・写真13・安兵衛碑7）。もはやこの付近は三宅安兵衛遺志碑の乱立状態である。その辻には歴史街道碑（14）もあり、学生はこの時点で不穏な空気を察知したようである。300メートルほど歩くのに45分もかかるのだから先が思いやられるのも無理はない。ただし、この先はしばらく石碑はなく、街道の街並みの調査のみとなる。この付近は木造建築家屋が並ぶところもあり、いくぶん旧街道らしい様相である（15・写真14）。道路の両脇にある水路には蓋がされているが、その内側に歩行者の安全と車のスピード抑制のために歩行者用の路面が白砂利混じりの舗装で設けられている。

細い東西路との交差点を越えた右側に、壁面が朱一色の家屋が目に飛び込んでくる（16・写真15）。しかも、その玄関には鳥居がある。どうやらこれは民間の家屋ではなく、神社であったようだ。



写真 11 「八角院」碑（安兵衛碑 5）
三角形型の三宅安兵衛遺志碑は
この付近では珍しい。

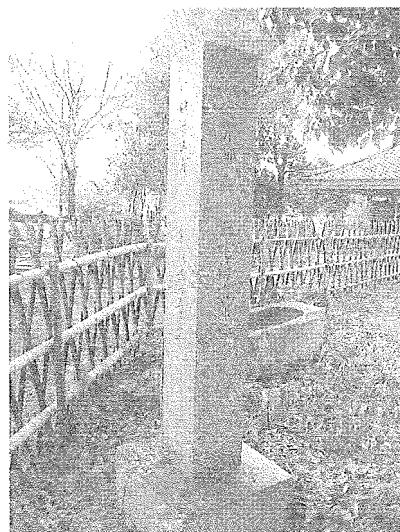


写真 12 「母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地」碑
(安兵衛碑 6)



写真 13 「水月庵」碑（安兵衛碑 7）
向かって右側が旧道で、
その奥に八角堂がある。



写真 14 街道の街並み
東高野街道に木造建築家屋は多いが、
並んで建つ所は少ない。

鳥居には「泥松稻荷大神」と書かれている。別行動をしていた学生の一班は、付近の方のご厚意により、社殿の内部を見せていただいたようである。『八幡の昔ばなし』に掲載される民話⁽²⁾によれば、いたずら狸が改心して「泥松大神」になり、それが祀られているのがこの神社であること。それにしても狸が稻荷とはなかなかの転身である。

信号を過ぎてしばらく歩くと、左側に細い路地がある。その角（南西側）に「橋本近道」と刻まれた三宅安兵衛遺志碑がある（17・写真 16・安兵衛碑 8）。この碑は塀壁と家屋に挟まれているため、普段歩くだけでは気がつかない場所となっている。現地にありながら、活用が困難となっている遺産の1つだろう。その点、この碑の北東側の辻に立っている石標は、「東在所道」を示すもので、同じく三宅安兵衛遺志碑である。こちらは形状も大きく、またきわめて目につきやすい場所に立っている

表1 調査ルート上の三宅安兵衛遺志碑

石碑ID	地図上 の場所	方向	表面	右面	裏面	左面
1	5	西面	淀川舊跡	向て左 寶青庵一丁半	昭和二年京都三宅安兵衛依遺志建之	向て右 圓福寺三丁半
2	6	東面	【聖徳太子御自作／達磨大師靈像安置】江湖道場 圓福禪寺	向て右 【洞ヶ峠二丁／圓福寺五丁／田ノ口三十丁】	昭和丁卯二年京都三宅安兵衛依し遺志建之	向て左 【西二子塔三丁／美ノ山五丁／長尾三十丁／峠五丁】
3	8	北面	【正平七年役／神器奉安所】岡の稻荷社	右 高野街道 【峠十五丁 津田二里／野崎四里 柏原六里／從是高野山へ至】	文學博士西田真二郎書／昭和二年七月京都依三宅安兵衛遺志建之	左 奈良街道 【美の山十丁 松井廿四丁／大住一里薪一休寺二丁】
4	10	南東面	正平役血洗池古跡 【右八角堂／左 男塚】	—	昭和二年京都依三宅安兵衛遺志建之	—
5	11	南東面	【西車塚跡／國寶乾□阿弥陀像／同元横川元大師像】八角院	—	昭和二年建之京都三宅安兵衛遺志	—
6	12	南面	母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地	昭和五年泉南濱田青陵書	京都三宅清治郎建之	—
7	13	北面	水月庵	向て右 【北 八幡宮本社十丁／京阪八幡停留所廿丁】 【西 幣原水月庵八丁／招堤十八丁／枚方二里】	昭和二年建之京都三宅安兵衛遺志	向て左 【美濃山八丁／長尾停留場一里／四條畷三里】
8	17	東面	橋本近道 西十五丁	樟葉道 停留所西十五丁	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	(不明)
9	18	北面	左 東在所道 【广津八丁／岩田渡船場廿三丁／下奈良渡船場廿二丁】 【内田二十五丁／寺田一里半／宇治二里】	左 京街道 【御幸橋廿丁／鳥羽三里／伏見二里半】 【淀一里半／東寺四里廿丁】	昭和二年十月京都依三宅安兵衛遺志建之	—
10	21	東面	【尾張大納言義直侯／母堂相應院殿墓所】正法寺	北 【九品寺一丁／京阪電車十八丁】	昭和四年三月 糜京都三宅安兵衛遺志建之	南 【八角堂四丁／圓福寺五丁】
11	22	西面	九品寺 【左 巢林庵一丁／右 正法寺二丁】	—	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—
12	25	東面	寝物語古跡國分橋	—	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—
13	28	西面	巡檢道 【洞ヶ峠円福字廿丁／岡の稻荷社十丁／京阪電車停車場十丁／八幡宮志水坂登六丁】	右 宇治近道 【奈良演十五丁／佐山廿五丁】 宇治町二里余	昭和三年春京都三宅安兵衛依遺志建之	—
14	32	西面	正平役園殿口古戰場 【左 本妙寺半丁／右法園寺二丁】	—	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—
15	32	西面	金剛律寺故址 京都元標四里三十二丁	—	昭和三年春京都三宅安兵衛依遺志建之	—
16	33	北面	小野賴風塚	向て右 松花堂墓所	昭和二年建之京都三宅安兵衛	向て左 善法律■■
17	38	東面	日門上人墓所本妙寺 【右 念佛寺二丁／左 園口半丁】	—	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—
18	38	東面	正平役城之内古跡 【左 山ノ井一丁／右 本妙寺前】	—	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—
19	41	北面	松花堂舊跡	向て右 神應寺二丁	昭和■■(二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之:『やわたの道しるべ』による)	向て左 賴風塚二丁
20	42	東面	山ノ井戸 【八幡泉坊跡二丁／右 松花堂墓所十間】	—	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—
21	43	西面	八幡橋 【右 志水町十二丁／左 橋本町十一丁】	右 奈良街道 【川口十五丁／下奈良二十丁／上奈良廿五丁／内里三十丁】 【上津屋一里／岩田一里六丁／大住二里／田辺二里半】 【木津三里／奈良六里半】	昭和三年春京都三宅安兵衛依遺志建之	左 宇治街道 【奈良演廿二丁／下津屋廿五丁／佐山三十丁】 【宇治新田二里／宇治町二里半】
22	44	西面	安居橋 左 反橋跡半丁	右 淀屋舊邸并單傳庵	昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之	—

「地図上の場所」は図2・3・5内の数字を示す。

〔 〕は割注表記を、■は判読不可能な部分（文字数不明）を表す。



写真 15 泥松稻荷大神
鮮やかな朱壁がひときわ印象に残る。



写真 16 「橋本近道」碑（安兵衛碑 8）



写真 17 「東在所道」碑（安兵衛碑 9）
左側に延びるのが東在所道。その左側には
休憩ポイントの公園がある。

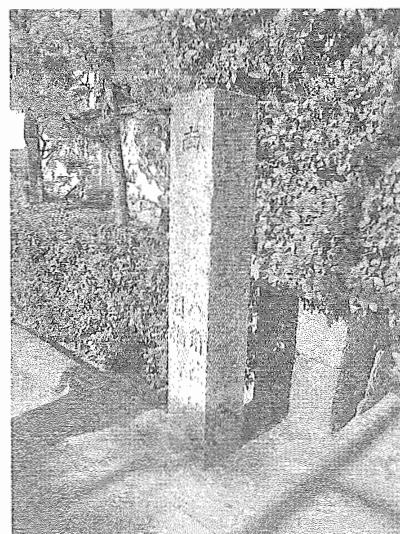


写真 18 「正法寺」碑（安兵衛碑 10）



写真 19 「九品寺」碑（安兵衛碑 11）

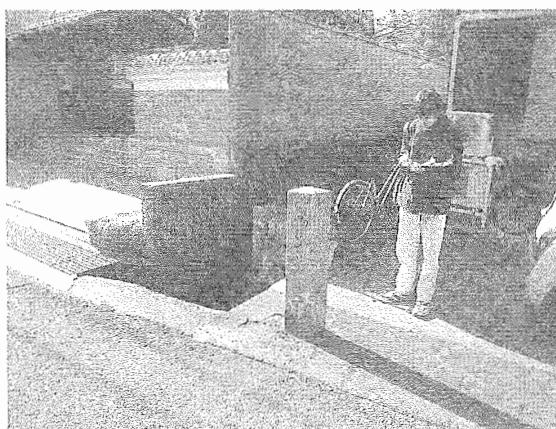


写真 20 「寝物語古跡国分橋」碑（安兵衛碑 12）
物言わぬ碑から何とか情報を引き出そうとする学生。



写真 21 側溝のある道路
だがしかし、影で側溝がうまく撮影できず。
晴天であるのも善し悪しで。

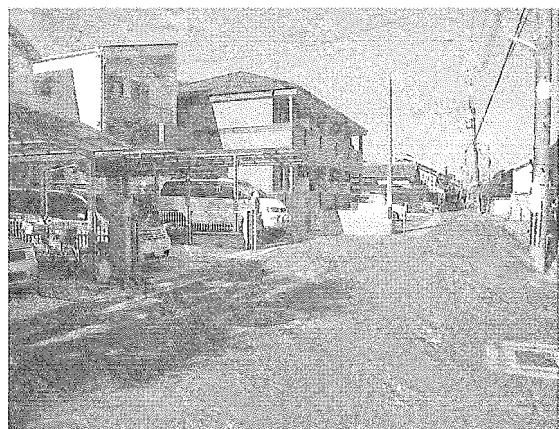


写真 22 道路幅の変更地点
建物の面が段階的にずれていく。
面白いけれど…。

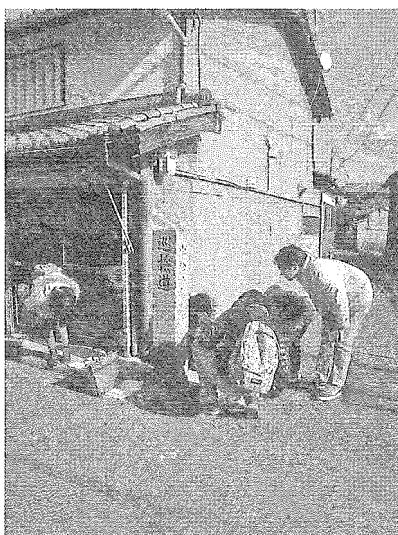


写真 23 「巡検道」碑と巡検する学生

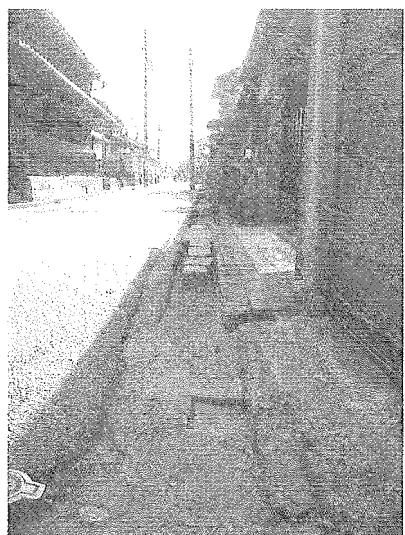


写真 24 水路の起点部分
(道路西脇部分を南向きに撮影)

(18・写真 17・安兵衛碑 9)。

この石碑の調査を終えた時点で 11 時 50 分となっており、そばにある「ありあけ児童公園」で昼食をとることにした。各自、軽食を持参していたが、まさに軽食であり、ゆっくりと休憩をするまでなく食べ終わり、20 分程度の休憩で再び調査に戻った。

歩き始めるとすぐ右側に歴史街道碑があり（19）、その北側辺りからやや上り坂となる。ところどころに煙り出しのある瓦葺きの民家の残る道を進むと、左側に安心院、正法寺が続けて現れる。正法寺の参道入り口には、向かって左側（南）には歴史街道碑（20）、右側には「正法寺」と記された三宅安兵衛遺志碑がある（21・写真 18・安兵衛碑 10）。これまでの歴史街道碑は「東高野街道」と大きく表示されていたが、この碑は「正法寺」と記されている。

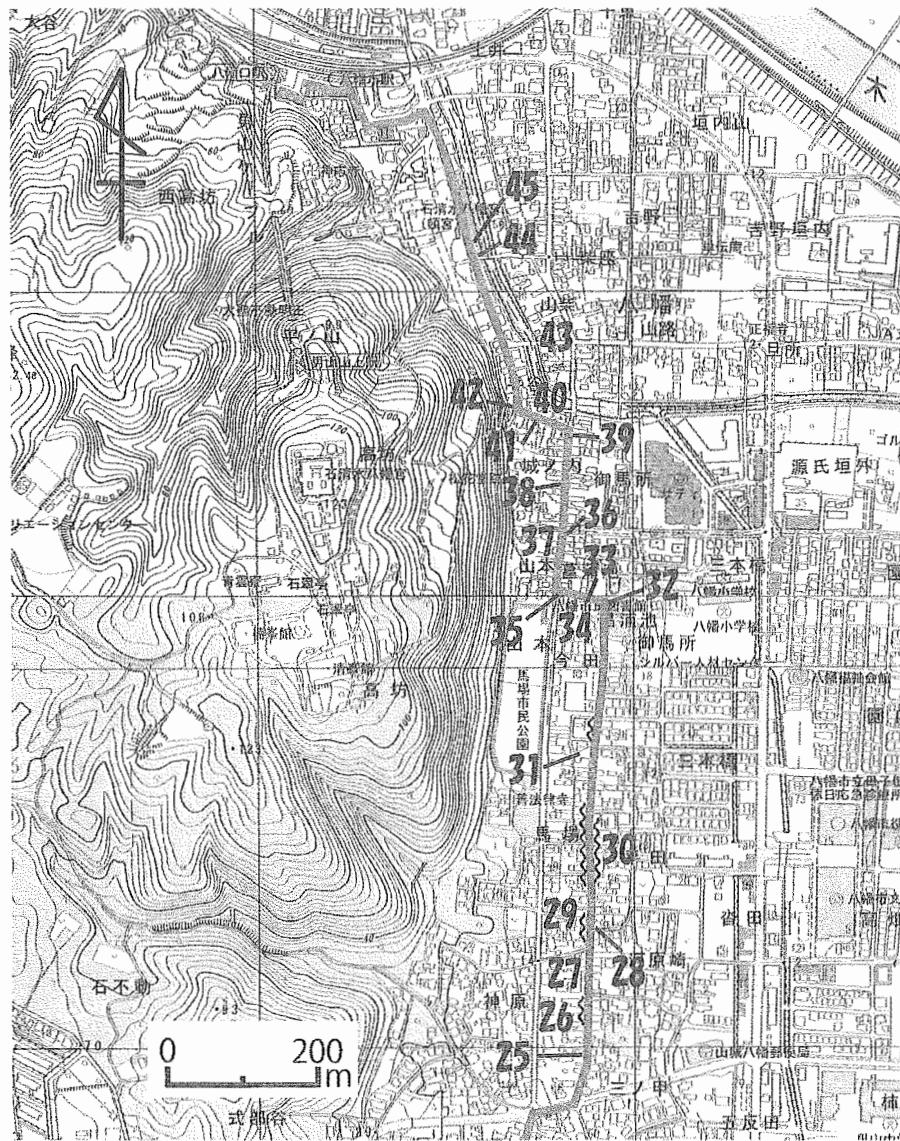


図5 調査ルート3：神原交差点～八幡市駅

原図：10,000分1地形図「八幡市」（平成15年部分修正）、同「淀」（平成15年部分修正）

正法寺から、大きな旧家を右手にみながら北上すると、九品寺に入る路地が現れる。そこにも「九品寺」と記された三宅安兵衛遺志碑（22・写真19・安兵衛碑11）。この碑は表面と裏面のみ刻まれており、裏面の「昭和二年十月京都三宅安兵衛依遺志建之」という記載のうち、「依遺志建之」はやや小さく刻まれている。三宅安兵衛によって建立された碑であることを言いたいのである。なお、この「九品寺」碑には「右 正法寺二丁」とあるが、先の「正法寺」碑には「九品寺一丁」とあり、示される距離が異なっている。

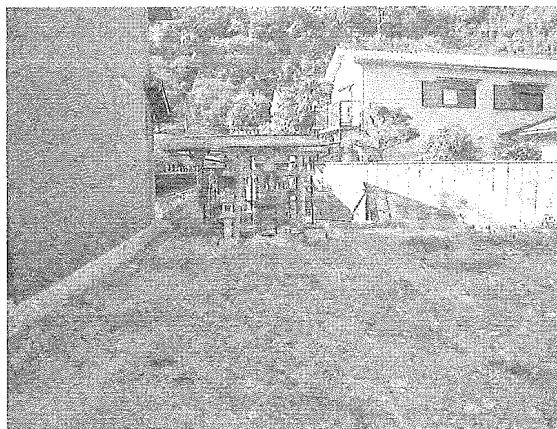


写真 25 諏訪大明神・天満宮・道祖神
取り残されたかのように空地の奥にひっそりと。

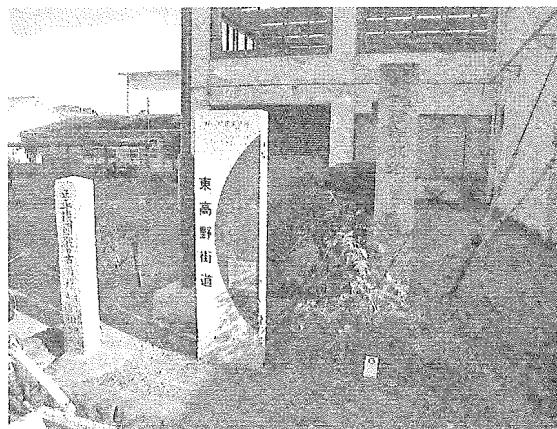


写真 26 石碑 3 兄弟
左から「正平役園殿口古戦場」碑（安兵衛碑 14）、東高野街道碑、「金剛律寺故址」碑（安兵衛碑 15）



写真 27 「小野頬風塚」碑（安兵衛碑 16）

3. 神原交差点～京阪八幡市駅

九品寺を過ぎると、すぐに神原の交差点となり、そこから旧街道は一本東側となる。神原交差点に到着したのは 12 時 30 分であった。神原交差点の北東角、また、東に 100 メートルほど行ったちょうど旧街道が再び北上するあたりの道路南側に歴史街道碑がある（23・24）。いずれも「東高野街道」と記されている。

再び北上を始めると、図 5 にあるように、左手にすぐ三宅安兵衛遺志碑が出迎える（25・写真 20・安兵衛碑 12）。この碑は「寝物語古跡国分橋」を示すものである。また、「九品寺」碑と同じく、建立は昭和 2 年 10 月で、「依遺志建之」が小さいタイプである。

北上すると、右手に世音寺がある。その付近の道路西側は側溝に蓋がされておらず、石組みの水路が顔をのぞかせる（26・写真 21）。その付近は旧家だが、その北側には新築の家屋が数軒並ぶ。それらの家は道路から数メートル奥まっており、前に車庫が設けられている。その北方のアパートの前面も駐車場となっているが、そこから道路幅は狭くなっている。全体として、この付近の道路からはちぐはぐな印象を受ける（27・写真 22）。竹中友里代氏によれば、この道路幅の変換点は近世に地蔵院が建っていたところで、その南門部分が突出していた跡だという。確かに近世の古地図には該当部分に地蔵院が道路に対して張り出したような表現で記載されている⁽³⁾。

そこからしばらく行くと、東に道が分かれている地点があり、そこに三宅安兵衛遺志碑がある（28・写真 23・安兵衛碑 13）。碑によれば、この道は「巡検道」というらしい。付近は水路（西侧）や築地のある趣ある家屋が並ぶ。水路は一度

途絶えるが（29・写真 24）——北から南に傾斜しているため、本来は途絶えるというより始まると言った方が適切なのだが歩くルートに従って途絶えるとしておこう——、しばらくすると再び現れ、そこでは東側にも設けられている（30）。

両側の水路が再びなくなる付近から少し北に行くと、左手に空き地が現れる。手元に準備していた住宅地図には家屋が表現されているので、空き地になったのは最近だろう。その空き地の奥には小さな社がある（31・写真 25）。諏訪大明神・天満宮・道祖神が祀られており、祠はそれぞれとても新しい。ただし、鳥居は「大正十三年二月」であり、祠だけが近年新調されたものと思われる。灯籠が一基あるが、そこには「施主 丸岡丑之助」とあった。

この地点から北に行くと、左手に NTT 西日本の建物があり、さらに行くと道が直角に左折する場所の右手に八幡市民図書館がある。この図書館の敷地内でちょうど直角の外側コーナー部分に当たる場所に 3 つの石碑と水準点が設置されている（32・写真 26・安兵衛碑 14・同 15）。石碑のうち 2 つが三宅安兵衛遺志碑であり、1 つが歴史街道碑である。北側の安兵衛遺志碑（安兵衛碑 14）は「正平役園殿口古戦場」を示すものである。昭和 2 年 10 月建立で、他の同時期建立のものと同じタイプとなっている。この碑は後述する徳岡稻荷の交差点にある歴史街道碑付近（36）にあつたものが移されたものである⁽⁴⁾。南側の碑（安兵衛碑 15）は「金剛律寺故址」を示す大型の碑であり、京都元標までの距離も示されている。

図書館前を左折すると短い東西路となるが、その途中左側に南向き路地がある。その入り口左側部に「小野頼風塚」と記された下部が埋没している三宅安兵衛遺志碑があり（33・写真 27・安兵



写真 28 頼風塚（男塚）
女塚は松花堂公園にある。



写真 29 「本妙寺」碑（安兵衛碑 17）と
「正平役城之内古跡」（安兵衛碑 18）



写真 30 石畳風の舗装
側溝部分の仕様は稻荷社の北側から施されていたもの。



写真 31 松花堂秦勝寺

入り口には「松花堂旧跡」碑（安兵衛碑 19）がある。



写真 32 相槌神社と山ノ井戸（右側）

神社を示す碑かと思って近づくと「山ノ井戸」碑（安兵衛碑 20）だった。



写真 33 舗装の変化

衛碑 16)、路地を入っていくと「頬風塚」(男塚)がある (34・写真 28)。頬風塚の説明板は、路地入り口に八幡市教育委員会・八幡市郷土史会が、また塚のそばに謡曲史跡保存会のものが建っている。

100 メートル弱で東西路は終わり、右折して再び北に進路をとる。その T 字交差点の南東角には、「東高野街道」と書かれた歴史街道碑が建っている (35)。歴史街道碑はその 100 m ほど北に行った交差点の南東角にも建っている (36)。また、この交差点の南西部には小さな稲荷社もある (37)。現地で名前は確認できないが、住宅地図によれば「徳岡稲荷」という名前のようなである。

さらに北上すると、本妙寺となる。本妙寺前には 2 基の三宅安兵衛遺志碑がある (38・写真 29・安兵衛碑 17・同 18)。ここに建つのはいずれも昭和 2 年 10 月建立の「依遺志建之」が小さいタイプであり、向かって右側の手前に立つものが「本妙寺」を (安兵衛碑 17)、左側奥に立つものが「正平役城之内古跡」を示すもの (安兵衛碑 18) となっている。ただ、後者は「左 山ノ井一丁／右 本妙寺前」と記されており、指示する方向からすると、この場所に当初あったものではないようである。その後、竹中氏より、これはもと本妙寺前の「マルナカ呉服店」付近にあったもので、ビル建設に伴い移転したものであるとのご教示をいただいた。なお、現在のマルナカ呉服店はやや離れた場所にあるが、本来は本妙寺付近にあったとのことである。

大谷川の手前で街道は再び左折する。その交差点の南東角にも歴史街道碑が置かれている (39)。三宅安兵衛遺志碑には及ばないが、歴史街道碑もかなりの頻度で登場する。主要な辻には必ずあり、往来する者たちにとって頗もしい存在となつていて

る。

さて、左折すると道路は石畳み風の舗装に変わる(40・写真30)。東西路の区間は短いがその中間部南側に松花堂秦勝寺が左側にある。入り口は木柵で囲われているが、その木柵に接する形で「松花堂旧跡」を示す三宅安兵衛遺志碑がある(41・写真31・安兵衛碑19)。そして、東西路の突き当たりには相槌神社があり、その右手には井戸がある。傍らに昭和2年10月タイプの三宅安兵衛遺志碑があり(42・写真32・安兵衛碑20)、それによれば、この井戸は「山ノ井戸」である。

100メートルほど北上すると、右から八幡橋を渡ってきた道路と合流する。この合流部から、石畳み風舗装の調子が変わり、まさに石畳みの舗装となる。そのT字交差点の北東角には歴史街道碑と三宅安兵衛遺志碑もみえる(43・写真33～34・安兵衛碑21)。三宅安兵衛依遺志碑は大型のタイプであり、あわせて17ヶ所への道のりが記されている。

石畳の道を北上すると左側に石清水八幡宮の駐車場、右側には大谷川沿岸の公園となる。大谷川にかかる安居橋は木製でそのたもとには三宅安兵衛遺志碑がある(44・写真35・安兵衛碑22)。そのすぐ北側には「石清水きよき流の絶えせねばやどる月さへくまなかりけり」という能蓮法師の歌碑が建っている(45・写真36)。説明板によれば、1987年の中秋の名月(10月7日)に「やわた文学碑建立事業」の4基めとして建立されたとのことである。

この歌碑を過ぎると、京阪八幡市駅まで200メートル余りであり、14時15分に駅に到着した。学生たちもその前後15分程の間には到着しており、14時30分には全員が無事、調査を終えた。



写真34 八幡橋たもとの新旧2つの碑
里丁表記の「八幡橋」碑(安兵衛碑21)では役立たずということか。

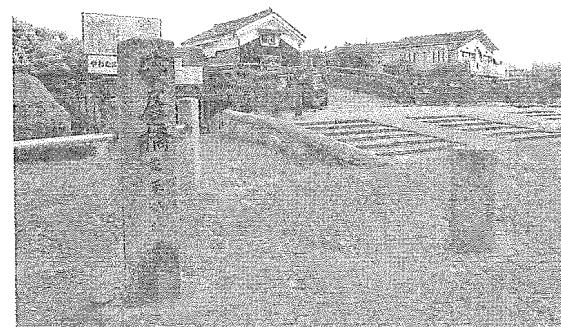


写真35 「安居橋」碑(安兵衛碑22)と安居橋
今回のルート最後の三宅安兵衛遺志碑となった。



写真36 能蓮法師歌碑
写生をされている方と一緒に。

おわりに

今回の調査では、旧家や水路の状況など、街道の雰囲気を残すものも見つかり、舗装の仕様などでその雰囲気を伝える工夫がなされている場所も確認できた。もちろん、現在の木造建築家屋が江戸時代にさかのぼるかと言えばそうではない。また江戸時代の東高野街道は石畳ではないため、現在の石畳風舗装が往時の景観に近いかと言えば全くそうではなく、完全に「現代風」の仕上がりである。ただし、単なるアスファルト舗装にするのではなく、現代人が「街道」であったことを踏まえて石畠風の舗装にしようとしたその行動は、地域遺産を伝えようとする試みとして評価すべき点であろう。むしろ、そのような試みに対して、方向性を決める素材としてもらうべく歴史的な景観の姿を適切に示すことがこれまで不足していたことを痛感するのである。

また、今回のルート上には、三宅安兵衛遺志碑が 21 基、歴史街道碑が 11 基あり、その他にも歌碑や慰靈碑など、さまざまな石碑が確認された。三宅安兵衛遺志碑については『やわたの道しるべ』⁽⁵⁾でも取り上げられ、また近年は中村武生氏の調査⁽⁶⁾などによって安兵衛父子の活動の全体が捉えられようとしている。今回はあくまでも街道景観調査であり、石碑をくまなく探すことを主眼には置いていないため、八幡市域にある三宅安兵衛遺志碑の 3 分の 1 にも満たない石碑しか出会っていない。それでも、1 つの街道のわずか数キロメートルの距離にこれだけの数を建立するのは、きわめて特徴的である。このような路傍の地域遺産を活かしていくはどういうことなのか、今後、考えていくべき課題であろう。

【謝辞】

本調査での不明点や不備について、竹中友里代氏に多大なご教示を賜った。記して感謝を述べたい。

【註】

- (1) 男山丘陵の植生変化については、下記に詳しい。八幡市教育委員会『男山で学ぶ人と森の歴史』八幡市教育委員会、2005。
- (2) 『八幡の昔ばなし (四)』八幡市文化振興会民話部会、1986、2-13 頁。
- (3) 竹中友里代「二つの石清水八幡宮神領絵図の景観」(東昇・竹中友里代編『八幡地域の古文書と石清水八幡宮の絵図——地域文化遺産の情報化』京都府立大学文学部歴史学科、2010) 78-91 頁。
- (4) 『やわたの道しるべ』には旧地点で表記されている。八幡市郷土史会『やわたの道しるべ』八幡市郷土史会、1982、19-20 頁。
- (5) 前掲 4
- (6) 中村武生「京都三宅安兵衛・清治郎父子建立碑とその分布——大正期及び現京都市域を中心に——」花園史学 22、2001、67-87 頁。

表紙の解説

	1 2 3
5 (裏)	4
	(表)

- 1 聞き取り調査の様子
- 2 善法律寺と紅葉（提供：善法律寺）
- 3 石造物調査の様子
- 4 安居橋と桜（撮影：中井正寛氏）
- 5 中ノ山墓地 十三仏の阿弥陀像（撮影：中井正寛氏）



京都府立大学文化遺産叢書 第4集

八幡地域の古文書・石造物・景観 －地域文化遺産の情報化－

編 集 東 昇（京都府立大学文学部歴史学科准教授）

竹中 友里代（同 特任助教）

発 行 京都府立大学文学部歴史学科

〒 606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2011年3月31日

印 刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル